

# 堅粕2

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第405集



1995

福岡市教育委員会

# 堅粕2

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第405集



1995

福岡市教育委員会

## 序

堅粕遺跡群は、福岡市の中心部に位置し、近年は都心部と同様に再開発の時期を迎えています。また、市域内は、全般的に住宅が不足し、都市の空洞化が問題となりつつあります。

このたび、これまで病院の敷地内であった博多区千代2丁目地内において、住宅・都市整備公団が、土地の取得と集合賃貸住宅建設を計画しました。本書は、これにともなって福岡市教育委員会が実施した堅粕遺跡群第6次調査の成果を報告するものです。

今回の発掘調査では、弥生時代の自然流路かと思われる溝状造構と土坑、掘立柱建物跡などを検出することができました。

堅粕遺跡群での発掘調査は、これまでにまだ6次の蓄積しかなく、調査地点も散在しており、遺跡の内容はまだまだ不明と言わざるをえません。本調査は、このような堅粕遺跡群について弥生時代を中心として、新たなる知見を追加したものです。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理・報告までさまざまご協力をいただきました古賀病院および住宅・都市整備公団をはじめとする多くの方々に、心から謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

## 例言・凡例

1. 本書は、集合賃貸住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、  
堅粕遺跡群第6次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、大庭廉時が行なった。
3. 本書で使用した造構実測図は、大庭および大庭智子・池田菜穂子が、遺物実測図  
は大庭が作成した。整図には、大庭・井上涼子・萩尾朱美があたった。
4. 本書の造構実測図中に用いられている方位は、すべて磁北である。
5. 本書に使用した遺構写真・遺物写真は大庭が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
6. 本調査に関わる遺物および記録類の整理には、生垣綾子・今井民代・上塘貴代子・  
萩尾朱美、古谷宏子・保利みや子・森井恵があたった。
7. 本調査に係わるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、  
収蔵・管理・公開される予定である。

# 本文目次

第 1 章	はじめに	1
1	調査にいたるまで	1
2	発掘調査の組織と構成	1
3	遺跡の立地と歴史的環境	2
4	堅粕遺跡群の既往の調査	4
(1)	第 1 次調査	4
(2)	第 2 次調査	4
(3)	第 3 次調査	5
(4)	第 4 次調査	5
(5)	第 5 次調査	6
第 2 章	発掘調査の記録	7
1	発掘調査の経過	7
2	調査地点の立地と基本層序	8
3	遺構・遺物の概要	8
(1)	溝状遺構（谷地形？）	10
(2)	土坑	19
	2 号土坑	19
(3)	柱穴・掘立柱建物跡	19
第 3 章	小結	20

## 図・写真目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図	3
Fig. 2	堅柏遺跡群調査地点位置図	4
Fig. 3	第4次調査SE08実測図	5
Fig. 4	第5次調査SX036及び出土遺物実測図	6
Fig. 5	第6次調査地点位置図	7
Fig. 6	第6次調査全景（南西より）	8
Fig. 7	第6次調査遺構全体図	9
Fig. 8	溝状遺構実測図	10
Fig. 9	溝状遺構全景（南西より）	11
Fig. 10	溝状遺構 1区～2区（南より）	11
Fig. 11	溝状遺構トレンチ土層（手前から3区・2区・北東より）	12
Fig. 12	溝状遺構トレンチ土層	12
Fig. 13	溝状遺構トレンチ土層実測図	13
Fig. 14	溝状遺構土器出土状況 (1) Fig.15～10出土状況（北東より）	14
	(2) Fig.16～11出土状況（北西より）	14
Fig. 15	溝状遺構出土土器実測図 1	15
Fig. 16	溝状遺構出土土器実測図 2	16
Fig. 17	溝状遺構出土土器	17
Fig. 18	2号土坑実測図	18
Fig. 19	2号土坑 (1)	18
	(2)	18
	(3)	18
	(4)	18
Fig. 20	SB01（南東より）	19

# 第1章 はじめに

## 1. 調査にいたるまで

平成5年(1993)7月6日、古賀元晃氏より、福岡綜合開発株式会社を通じて、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区千代2丁目163番及び164番の一部に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。同地は、従前古賀胃肠病院の敷地の一部で、病棟及び住宅が建っていたが、同病院が敷地南半分に新病院を建築するに伴い、住宅・都市整備公団に売却、集合賃貸住宅が建設されることとなったものである。

福岡市教育委員会埋蔵文化財課では、申請地が堅粕遺跡群の西に隣接している為、試掘調査による遺跡の有無の確認が必要と判断、病院・家屋の解体の工程にあわせ、1993年7月27日、1994年2月25日の2度にわけて試掘調査を実施した。1993年7月の試掘調査では、若干の柱穴を検出したものの、搅乱が著しく、実質的に発掘調査は困難とみられた。しかし、母家の解体を待って実施した1994年2月の試掘調査では、表土下の砂層中から弥生時代の土器片が多数出土、地下室を設ていた旧病棟部分を除いて、発掘調査が必要であると判断された。

この結果を受け、埋蔵文化財課では住宅・都市整備公団及び福岡綜合開発株式会社と協議を持ち、発掘調査を実施し記録保存をはかることで合意をみた。そして、1994年5月19日、発掘調査を担当することとなった大庭をはじめて現地で最終的な打ち合せがなされ、翌20日より発掘調査事務所となるプレハブの設置等の条件整備に着手、6月1日より調査に取りかかることになったのである。

## 2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	古賀元晃
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛
調査総括	同 埋蔵文化財課課長 折尾 学 同 第2係長 山崎純男
調査庶務	同 第1係 古田麻由美
調査担当	同 第2係 大庭康時
調査作業	池田菜穂子 石川君子 江越初代 大庭智子 小野博子 関加代子 関義種 曽崎崎昭子 中山登樹 長浦スミエ 能丸節子 花田克子 藤原孝一郎 百津等 古谷宏子

その他、発掘調査に関する種々の条件整備、調査中の便宜については、古賀元晃氏及び古賀胃肠病院の皆様、住宅・都市整備公団からの御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

遺跡調査番号	9419	遺跡略号	KKS-6
調査地地番	博多区千代2丁目163、164の一部	分布地図番号	古塚35
開発面積	1591.90m <sup>2</sup>	調査対象面積	1592m <sup>2</sup>
調査期間	1994年6月1日～1994年6月29日		

### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

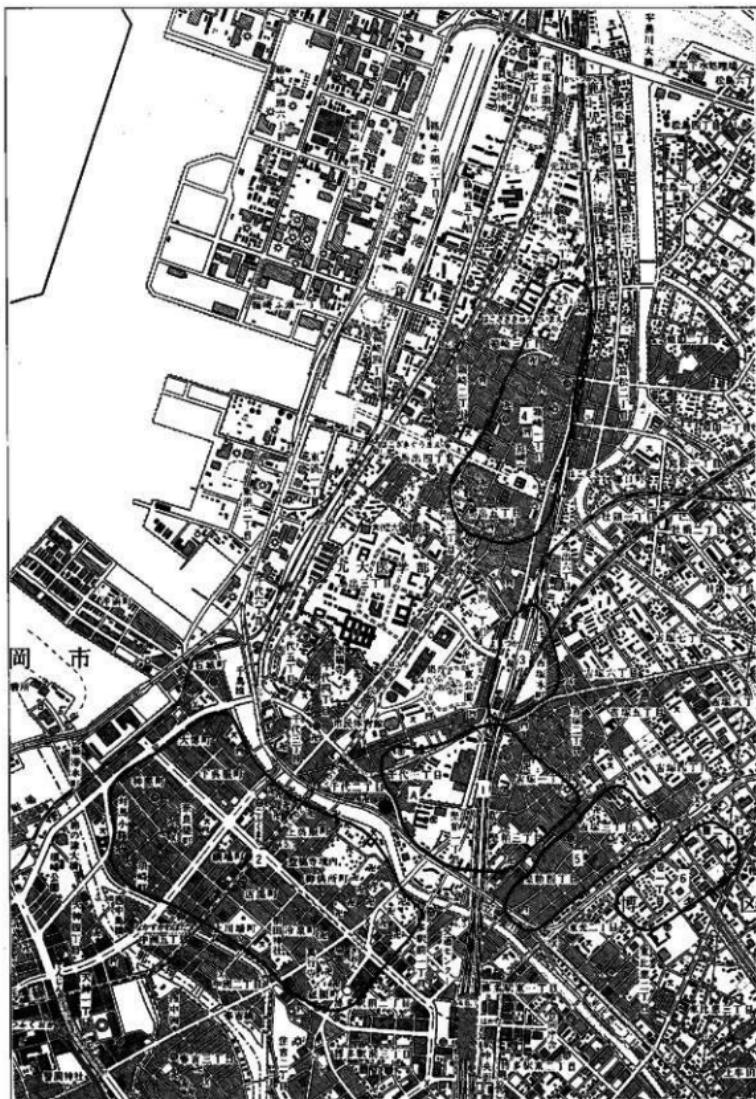
福岡平野の海岸部は、博多湾岸に形成された数列の砂丘によって何重にも縦取られている。これらの砂丘上には、弥生時代以来生活の営みがみられ、多くの遺跡が残されている。著名なものを西から掲げると、三角縁神獣鏡を副葬した方形周溝墓が見つかった藤崎遺跡、弥生時代終末期から古墳時代初期の標式遺跡である西新町遺跡、中世都市として著名で弥生時代から現存まで途切れることのない複合遺跡である博多遺跡群、中世博多と並んで町が出来、箱崎宮の門前町でもあった箱崎遺跡群などがある。堅柏遺跡群は、西には博多遺跡群に接し、東は古塚本町遺跡群をはさんで箱崎遺跡群へとつづいて行く。現在は、博多遺跡群との間は石堂川で隔てられているが、石堂川は戦国時代の開削と伝えられ、また地形の起伏をトレースしても、博多遺跡群の基盤となる砂丘列の内、南側の列とつながっていることがうかがわれる。したがって、博多遺跡群の南側砂丘から堅柏遺跡群・古塚本町遺跡群・箱崎遺跡群は、同じ砂丘上に乗った遺跡群と考えることができよう。

さて、堅柏遺跡群を含む福岡平野は、弥生時代を中心とした著名な遺跡が発見されている地域である。それらの内、主要な遺跡を時代を追って簡単に紹介すると、旧石器時代では諸岡遺跡・井尻B遺跡においてナイフ形石器・細石器などの出土が知られている。縄文時代では、平野最奥部の柏原遺跡で押型文期の遺構・遺物が発見されている。那珂川中流左岸の野多目遺跡群では、中期の阿高式、後期の坂の下式、北久根山式に加え、瀬戸内地方の後期初めの土器である中津II式、福田KII式土器が出土している。晩期後半の夜白式期になると、福岡平野には水田農耕が発見される。環濠集落でもある板付遺跡では、台地際にひかれた水路から取水する水田が発見され、縄文晩期水田がその出現頭初から技術的に高い水準を持っていたことを示した。同時期の集落としては、平成5年以降調査が続き、多種多様な木製品、礎板を敷いた大型掘立柱建物が発見された雀居遺跡が注目される。

弥生時代では、那珂川と御笠川にはさまれた地域に、いわゆる「奴国」の主要な遺跡群が並ぶ。上流からこれをあげれば、春日市内では奴国墓が営まれ、また青銅器・鉄器の生産地が集中する須玖岡本の遺跡群、環濠集落として早くから著名な板付遺跡、青銅器の鋳型・取瓶などが出土し青銅器の大きな生産地のひとつと考えられる那珂遺跡、細形銅劍を副葬した豪奢墓が発見された比恵遺跡などで、それらの周囲にも集落遺跡や豪奢遺跡が分布している。これら弥生時代の遺跡は、博多湾岸の砂丘上にまで及んでいる。堅柏遺跡においても、第1次調査で弥生時代後期の土坑が出上、隣接する吉塚本町遺跡においても弥生時代後期の土坑が検出されており、小規模な集落が点在していたものと考えられる。

古墳時代においても、那珂遺跡・比恵遺跡・博多遺跡などは主要な集落遺跡であった。博多遺跡では、古墳時代初頭の方形周溝墓・5世紀代の前方後円墳が、那珂遺跡では三角縁神獣鏡を副葬した那珂八幡古墳・横穴式石室を持つ東光寺剣塚古墳などの前方後円墳が並ぶ。これらの前方後円墳は、いずれも奴国の首長墓の流れに乗るものとされている。堅柏遺跡第2次調査地点においても布留式期の方形周溝墓が検出された。博多遺跡群の方形周溝墓群と共通の立地を示すもので、早良区の藤崎遺跡の方形周溝墓を含めて、博多湾岸の砂丘上に立地する一連の方形周溝墓群として覚えることも可能であろう。

古代末から中世を通じて、博多・箱崎には港がつくられた。これらは、河川が浜堤の背後を干涸して博多湾に出た川口部付近に営まれたもので、特に博多は大陸・朝鮮との交易で繁栄した。堅柏遺跡群や古塚本町遺跡は、博多と箱崎の両遺跡にはさまれており、両者との密接なかかわりが予測される地域である。



1. 堅粕遺跡群 A - 第6次調査地点 2. 博多遺跡群 3. 古塚本町遺跡  
4. 箱崎遺跡 5. 吉塚遺跡 6. 豊遺跡

Fig. 1 周辺遺跡分布地図 (1/25000)

## 4. 堅柏遺跡群の既往の調査

### (1) 第1次調査

1988年7月11日から7月28日まで、博多区千代一丁目地内において調査が実施された。調査面積は、360m<sup>2</sup>である。調査地点は、砂丘の稜線に近い南側斜面に位置していたが、全体に搅乱が著しく、遺構の遺存状態は悪かった。

弥生時代後期の土坑が検出されている。遺物は、大半が包含層からの出土で、弥生時代後期の土器がほとんどである。また、包含層付近の搅乱坑除去中、「貨泉」破片1が出土した。

### (2) 第2次調査

欠番。かつて、吉塚本町遺跡との間で調査次数の混乱があった。福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集『堅柏1』(福岡市教育委員会 1992)では、本報告書に示す第3次調査が第2次、第4次が第3次、第5次が第4次となっている。本書は、福岡市文化財年報で公表された調査次数に従うもので、これらの記録、出土遺物を収蔵・管理している福岡市埋蔵文化財センターでの資料管理との整合をはかったものである。

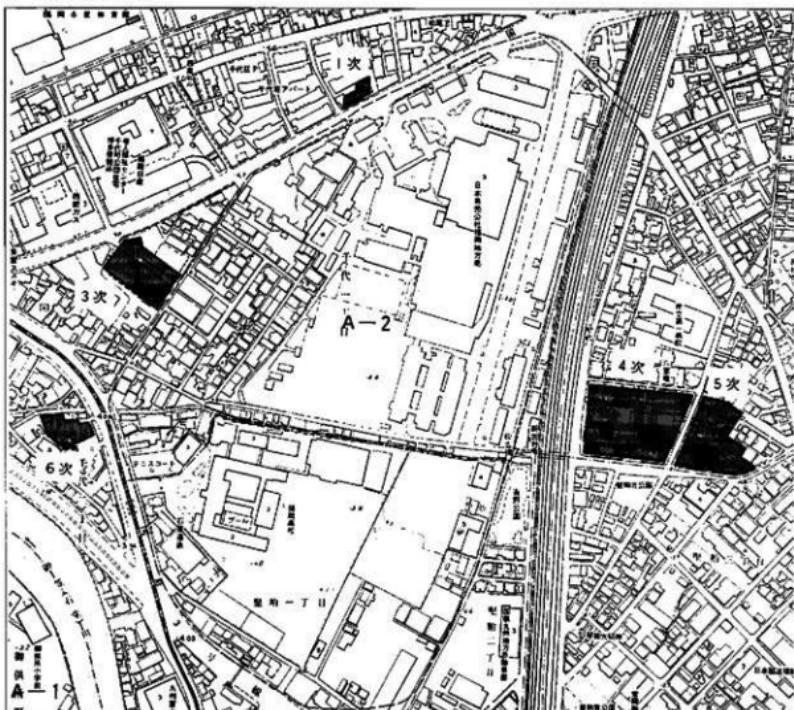


Fig. 2 堅柏遺跡群調査地点位置図

### (3) 第3次調査

1990年1月25日から2月7日まで、博多区千代2丁目292外において実施した調査である。565m<sup>2</sup>を調査した。

既存の建物の基礎による搅乱が激しかったが、古墳時代前期の方形周溝墓2基（1号墳・2号墳）、土坑7基、溝1条、奈良時代頃の土坑1基、近世の溝1条を検出することが出来た。

1号墳は、幅3m前後の溝で囲まれ、内法で径14mをはかる。溝は南西側で断絶し、陸橋部をつくる。主体部は組合式木棺で、長辺2.5m、短辺0.7mをはかる。周溝内より、多量の遺物が出土したが、主体部からの出土はなかった。北西側の周溝からは、水晶製切子玉が1点出土している。周溝内出土の土師器から、布留式古段階に比定される。

2号墳は、一部が工事で破壊されたため、全容を知りえない。主体部は、割竹式木棺と考えられている。

1号墳・2号墳とも、主軸は南西から北東方向に取る。

（福岡市埋蔵文化財調査年報Vol. 4 福岡市教育委員会1991）

### (4) 第4次調査

1990年5月14日から6月30日まで、博多区吉塚1丁目1番外において実施した。調査面積は845m<sup>2</sup>である。

本調査地点は、戦後に市営住宅が建設されるまでは西林寺の墓所であったと言われ、近世・近代の搅乱によって遺構はあらされていった。遺構は、

2面あった。第2面の下位にある第3層（黄褐色砂）・第4層（灰白色微砂）上面においても遺構は存在したが、調査期間の都合で、平面プランの一部を確認するにとどめている。隅丸長方形や円形の土坑、ピットが存在したが、遺物は出土していない。

調査した遺構は、奈良～平安時代の土坑74基、竪穴状土坑2基、井戸2基、江戸時代の井戸、近代の土坑などである。

コンテナ14箱分の遺物が出土した。古墳時代の遺物としては須恵器壺・蓋・甕が、奈良～平安時代では須恵器壺・蓋・甕・土師器壺・鏡、内黒土器碗・軒平瓦・布目瓦等が出土した。

Fig. 3に示したのは、8号井戸(SE-08)である。板材を横方向に組んだ井戸の中央に、直徑35cmの曲物を裾える。井戸は、80cm×70cmのほぼ正方形に組む。高さは18cmまで遺存している。井戸側、曲物とともに、腐蝕のため痕跡をとどめるにすぎない。須恵器片、土師器片が出土しており、奈良時代の井戸である。

（福岡市埋蔵文化財調査報告書第274集 1992）

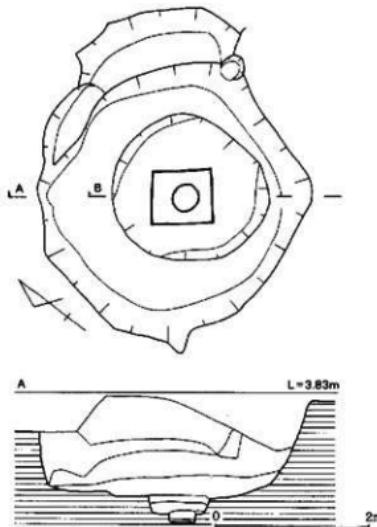


Fig. 3 第4次調査SE08 (1/60)

## 1. 第5次調査

1990年12月19日より1991年3月30日まで、博多区古塚・丁目568-2外において実施した。前述した第4次調査地点の東に隣接する。調査面積は、1600m<sup>2</sup>である。

古墳時代後期の土壙墓1基、奈良時代～平安時代の竪穴住居址1軒、土坑64基、上壙墓1基、木棺墓1基、溝6条、柱穴、近代の井戸、近・現代の墓塚などを検出した。

古墳時代後期の土壙墓からは馬具が出土した。鎧と轡の金具回りが遺存していた。奈良時代の竪穴住居址は、一辺5.1～6.1mの隅丸方形を呈する。主柱穴は4本と推定されている。炉や造り付けの竈は、検出されなかった。8世紀代の土壙墓は、須恵器环を供献していた。組合せ式木棺を置いた可能性が指摘されている。Fig. 4に示したのは、10世紀代の木棺墓と、これに供献されていた縁軸陶器小壺である。墓壙には小口板を受ける為の掘り込みがあり、組合せ式の木棺、さらに擴底から30cm程浮いて鉄釘が數本出土しており、棺蓋を釘止めしたものと考えられた。縁軸陶器小壺は、棺蓋の上におかれたものとみられる。口縁部内外はヨコナテ、体部下半は回転ヘラケズリし、底部には糸切り痕が残る。釉は灰緑色～緑色を呈するが、体部の4ヶ所に濃緑色の釉が垂下しており、緑彩を施したものと知れる。長門産縁軸陶器であろう。2のほか、遺物としては越州窯系青磁・縁軸陶器・墨書き器等が出土しており、一般集落とは異なる公的な施設の存在が推定されている。

(福岡市埋蔵文化財調査報告書第274集 堅柏1 福岡市教育委員会1992)

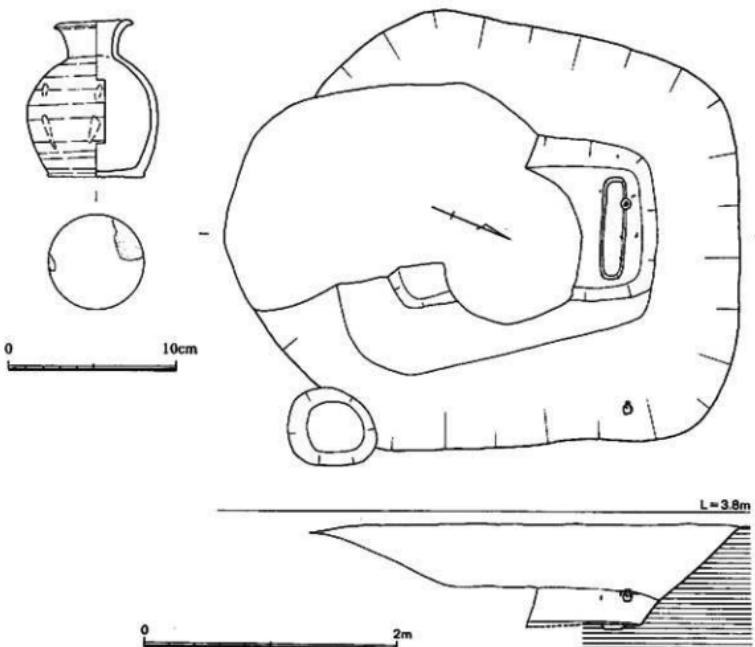


Fig. 4 第5次調査SX-036及び出土遺物

## 第2章 発掘調査の記録

### 1. 発掘調査の経過

堅柏遺跡群第6次調査は、1994年6月1日の器材搬入と表土掘削から始った。表土掘削は、バックホーによって、盛土と顕著な搅乱を除去したものである。なお、試掘調査の結果、かつて病院の建物があった申請地南北部分は、病棟の地階の為破壊されていたので調査対象から除き、ここに残土を仮置きし、調査終了後埋め戻すこととした。

表土剥きは2日を要し、6月2日より遺構検出、遺構調査に取りかかった。遺構調査においては、遺構検出面全体にわたって旧病院時の搅乱が点在し、薬瓶などのガラス容器片が散乱していた為、危険防止も兼ねて、まずこれらの搅乱を振り抜くことから始めた。また、南端近くの大規模な搅乱坑の壁面から土坑断面を確認（2号土坑）、この土層断面を生かすために、これから調査区南辺に平行してトレーンチを設定した。

遺構掘り上げは、6月20日に終了、21日に全景写真を撮影した。その後、土層観察用に残したベルトなどをすべて掘り上げ、6月29日にバックホーにより埋め戻し、同日調査器材の搬出も行ない、発掘調査作業終了した。

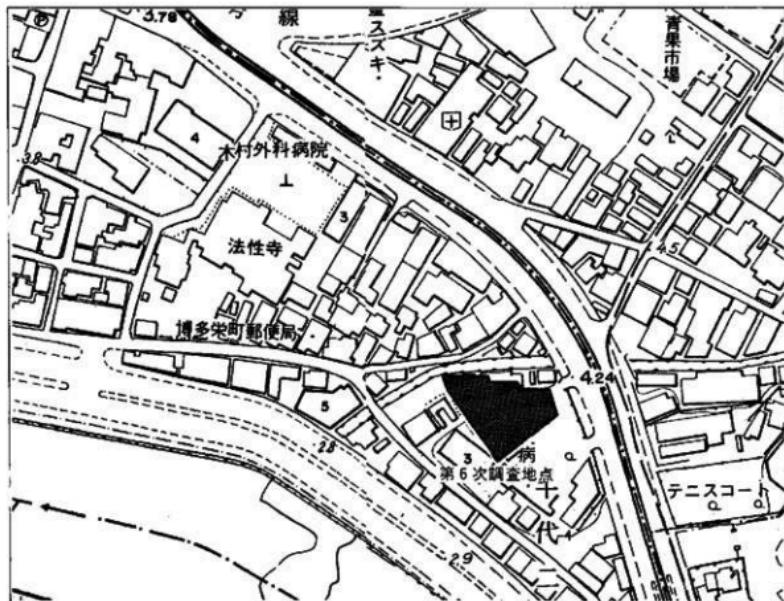


Fig. 5 第6次調査地点位置図

## 2. 調査地点の立地と基礎層序

第6次調査地点は、福岡市文化財分布地図「中・東部」（福岡市教育委員会）によると、堅粕遺跡群の範囲内に入っていない。これは、市街化が早くから進んでいた為、現地表からでは旧地形がわからなかつたこと、また同じ理由から現地表での遺物表探などは不可能で、遺跡の範囲を推定する手がかりを欠いたことによる。

第6次調査でも、遺構を検出した砂丘砂面は、削平を受けていたと思われ、旧地形を反映した要素は認めがたかった。わずかに、標高的には調査区東端が高く、西端で低い様で、これが旧地形をとどめたものとすれば、緩やかに西に傾斜していたことになる。ただし砂丘砂層上面は擾乱が著しく、断することはできない。

本調査地点の基本的な層序は、現地表下に厚さ50cm程度の表土層（盛土層を含む）があり、その直下は淡黄色の砂丘砂層となる。遺構は、すべて砂丘砂層上面において検出される。この状態は、むしろ砂丘上部が比較的近い過去に削平を受けたことを思わせる。

## 3. 遺構・遺物の概要

前述した様に、本調査区ではほぼ全面にわたって、大小の擾乱坑がみられ、遺構はその間に点々と残されていたにすぎない。

検出した遺構は、溝状遺構、柱穴、土坑、近・現代の井戸などである。



Fig. 6 第6次調査全景（南西より）

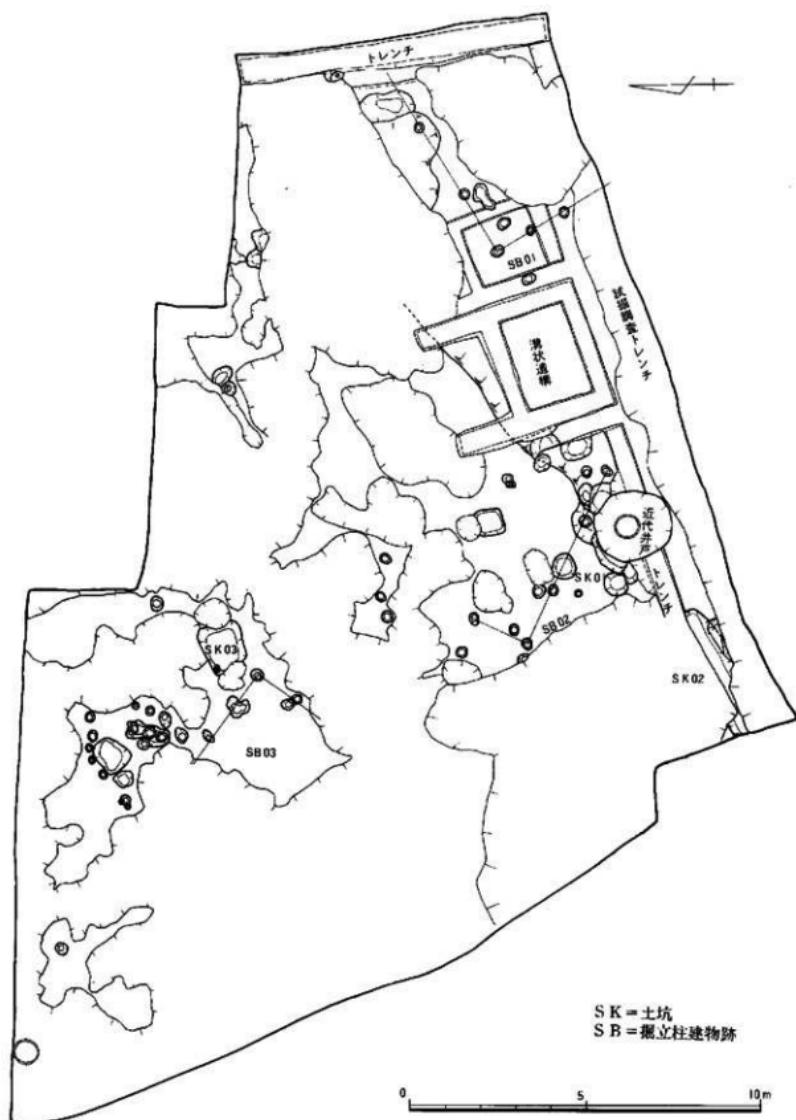


Fig. 7 第6次調査遺構全体図

### (1) 溝状造構（谷地形？）

這検査時に、地山である淡黄色砂とは異なる黄褐色砂の広がりを確認した。この黄褐色砂の分布を追って検出したのが、溝状造構である。一応のプランをおさえた後、トレンチを設定、その堆積状況の確認につとめた。各トレンチの土層実測図はFig.13に示す。

結論から示せば、自然地形としての凹み（谷地形など）が、調査区北東から南西方向にのびていたと考えられる。すなわち、トレンチの断面には、暗灰色砂・暗灰黄色砂などが傾きをなして認められ、明らかに落ちこみが存在したことを示している。また、これらの砂層中には、後述する遺物が含まれており、地山砂層（無遺物層）形成後の堆積であることを示している。しかし、堆積層の立ち上がり部分は極めて不明瞭で、人為的な溝状構の様な明らかな不連続面を認めがたい。堆積した砂も、地山砂丘砂と、質的には区別しがたい程に類似しており、周囲の砂丘からの砂の移動などで次第に埋っていったものと思われる。すなわち、堆積の過程で人為的な影響は認めがたい。また、北東側にあたる3区では溝状造構は極めて浅くなるが、調査区東壁に設けたトレンチでは、深さ40cm程しか認められず、しかも鍋の底の様な緩やかな凹みとなっていた。以上の諸点から、この溝状造構に人為的な掘削を想定するのは無理で、自然地形によるところのが妥当と考える。

トレンチ内の堆積状況の観察から、溝状造構の最深部分は、2区中央付近の中間の南側付近にあたると推測された。この点から、溝状造構の幅は12m以上と考えられる。

溝状造構底面の標高は、調査区東壁トレンチで3.75m、1区西側で3.25m、溝中心部（=最深部）に最も近いと思われる2区中央付近では2.9mを計る。したがって、全体的に北東から南西に向かって徐々に下向していく状態が推定されるのである。

以上の点から、小規模な谷地形の谷頭近くと考える。谷地形とすれば、下方に行き次第幅が広くなるから断定はもちろんできないが、おおむねN-45°Eを軸線にすると思われる。

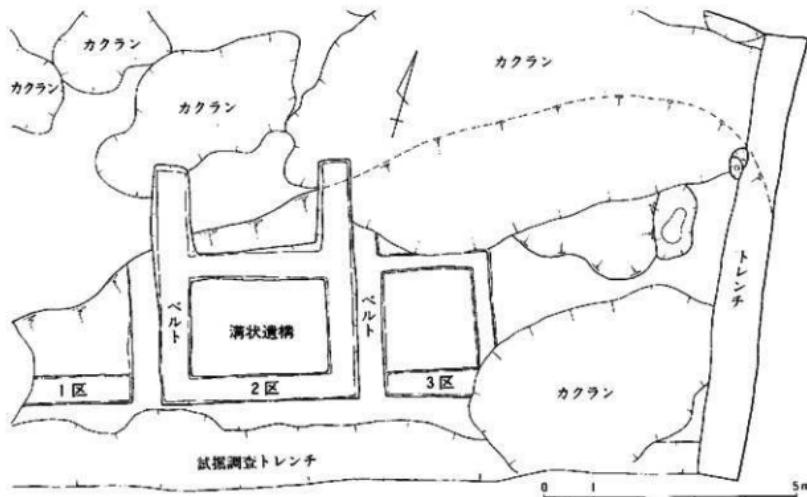


Fig. 8 溝状造構実測図 (1/100)



Fig. 9 溝状造構全景（南西より）



Fig. 10 溝状造構1区～2区（南より）



Fig.11 溝状造構トレンチ土層（手前から3区、2区、北東より）

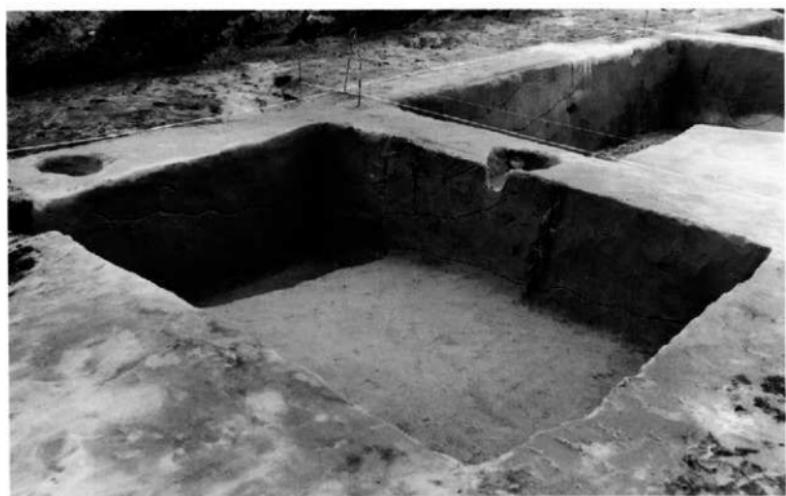


Fig.12 溝状造構トレンチ土層（北より）

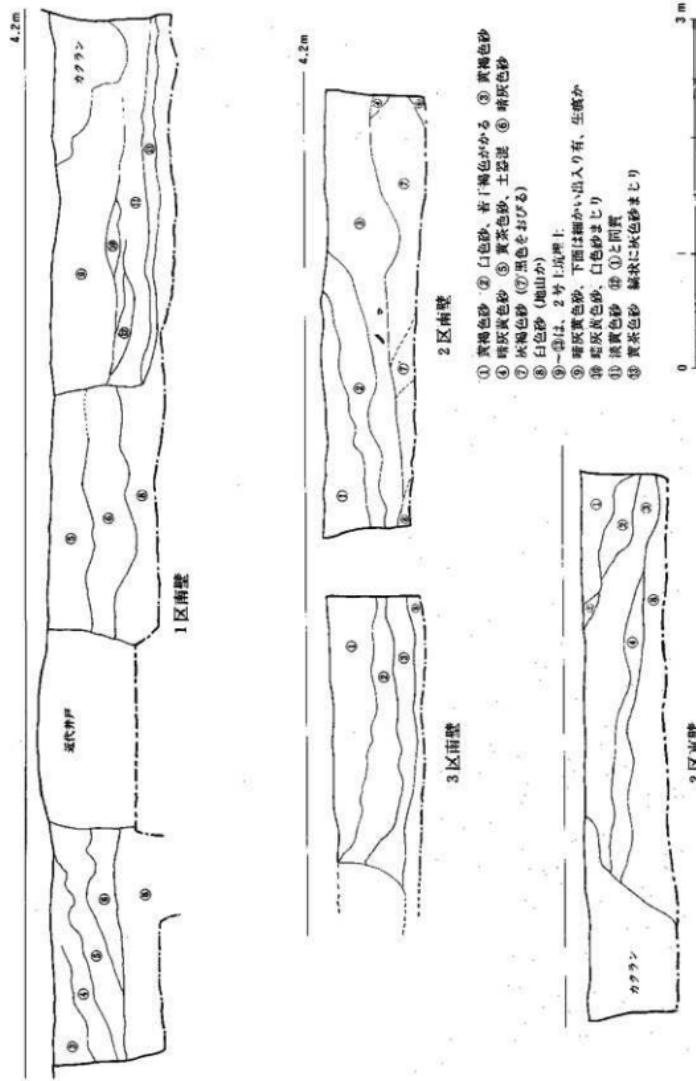


Fig.13 溝状遺構トレンチ土層実測図

溝状造構からは、弥生時代中期から後期にいたる土器が出土した。最もさかのぼるものでは、中期前葉の城ノ越式の壺の底部が出土しているが、量的には後期に主体がある。

出土した土器の一部を、Fig.15・16に示す。1は、コップ形の鉢である。内面はナデ調整、外面は縦刷毛目調整で、上半は横ナデする。2～10・14・16は、壺である。2は、内面はナデ調整、外面は縦刷毛目調整で、口縁は横ナデを施す。体部外面にはネズミの歯型が多く残る。3は手持ち整形された土器で、外面は密にヘラ磨きする。内面はナデする。4は、丹塗り研磨の袋状口縁壺である。口縁部上面から外面全体に、赤色顔料が残る。外面はヘラ磨き、内面はナデ調整する。5も丹塗り研磨と思われ、部分的に顔料が残っている。全体的に磨滅が激しい。内外面ともネズミの歯形が残っている。6は、二重口縁壺である。口縁から頭部の内外面はヨコナデ調整、体部内面は横向方向のヘラ削りを行なっている。7では、胴部がやや左右に張ってきた段階の壺である。底部中央に穿孔がある。外面の全面には、ネズミ歯型が密に刻まれている。8の胴部は、偏球形になっている。体部内面の下半は指ヶズリ、上半は指ナデで、頭部付近にはしばり痕もみられる。やや丸味をおびて垂れた底部中央に、穿孔がみられる。9も8と同様の特徴もつ。10は、袋状口縁壺である。3区から、破損した状況ではあるが一ヶ所にまとまって出土した (Fig.14-(1))。体部外面は、ほぼ全面に縦刷毛目調整で口縁部は横ナデする。内面はほぼ全体ナデ調整であるが、体部上半では指頭痕が、頭部ではしばり痕が認められる。14は鉢状口縁の大型の壺である。内面は磨滅し、調整不明。16は、大型壺の底部であろう。内面はナデ、底部内面は指押え、外面は縦に刷毛目を施す。11～13・15は、壺である。11の内面はナデ調整で、平滑に整えられている。外面は縦刷毛である。平底の中央には、穿孔がみられる。外面には、ネズミ歯形が密に残っている。1区の埋土中位から、倒置した様な形で出土した (Fig.14-(2))。12は、内外面とも刷毛目調整する。1区と3区から、バラバラに出土したものである。13は、城ノ越式の壺の底部である。15は、大きめの壺の口縁部である。口縁部内面は粗い横刷毛調整、体部内面はナデ調整、口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は粗い縦刷毛調整する。

これらの土器は、磨滅も少なく調整痕をよくとどめている。埋土が砂で、器壁がおかされにくいとい

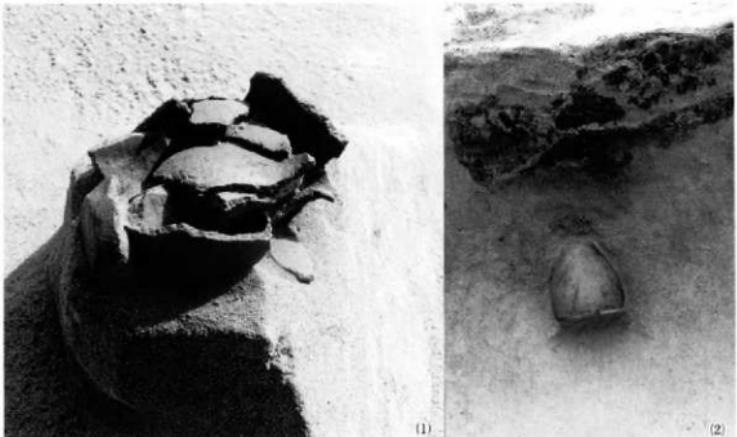


Fig.14 溝状造構土器出土状況

(1) Fig.15-10出土状況（北東より） (2) Fig.16-11出土状況（北西より）

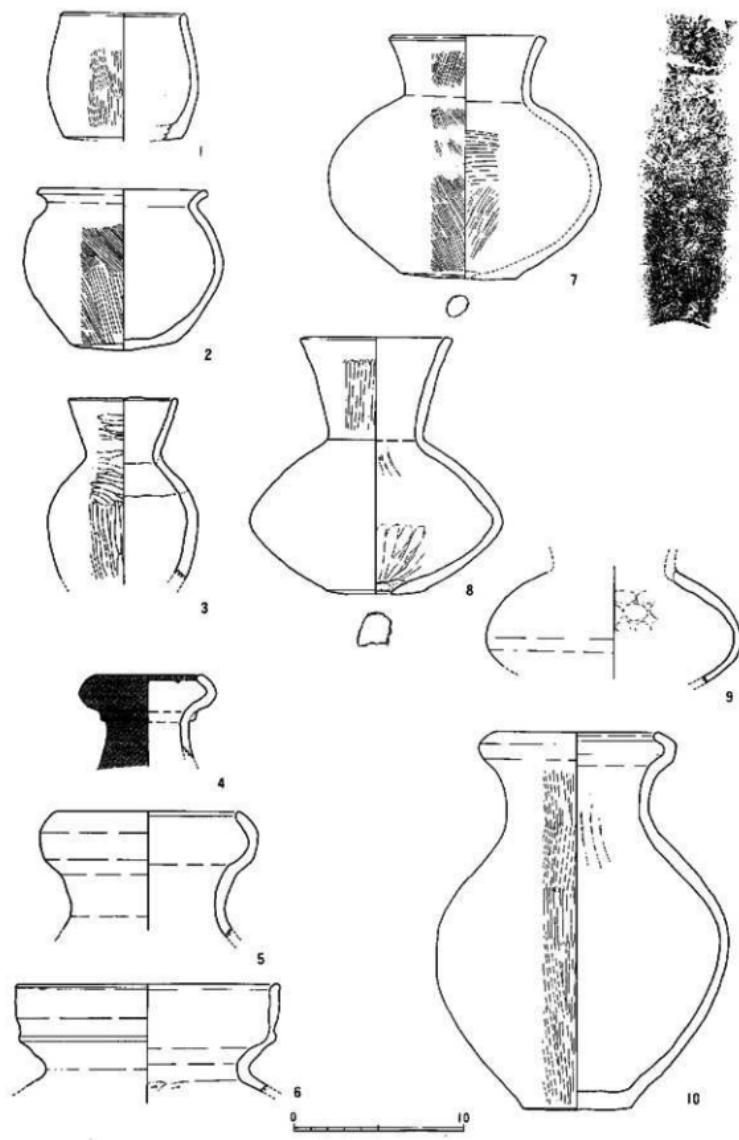


Fig. 15 漢状遺構出土器物實測圖 1 (1 / 3)

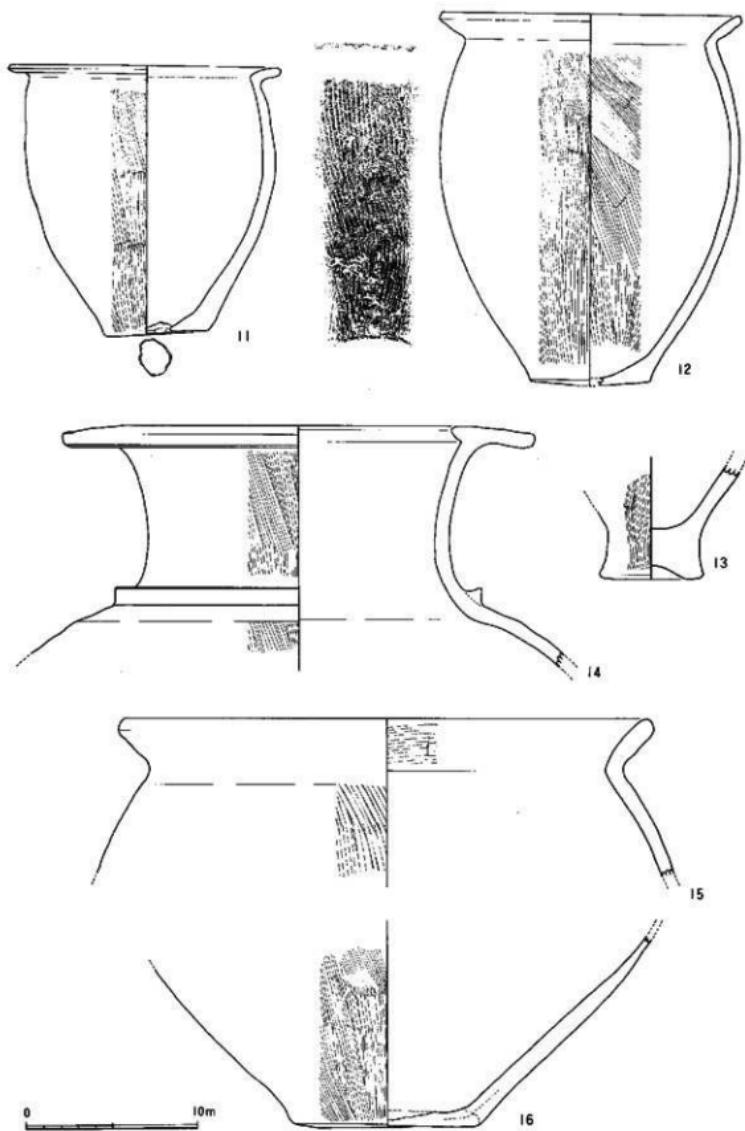


Fig. 16 溝状造構出土土器実測図 2 (1/3)



1  
Fig. 15-2



2  
Fig. 15-10



3  
Fig. 15-3



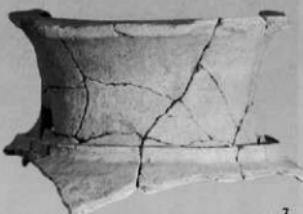
5  
Fig. 16-11



4  
Fig. 16-13



6  
Fig. 15-7



7  
Fig. 16-14

Fig. 17 溝狀遺構出土土器 (縮尺不統一)

うことがあるにしても、ローリングを受けていないことは明らかである。また、ネズミにかじられた土器が非常に多く、これらの土器が日用品として常用されていたことを示す。おそらくは、第6次調査地点の周辺に集落があり、溝状造構（浅い谷地形）に破損したり、不要になった土器などを投棄したものであろう。

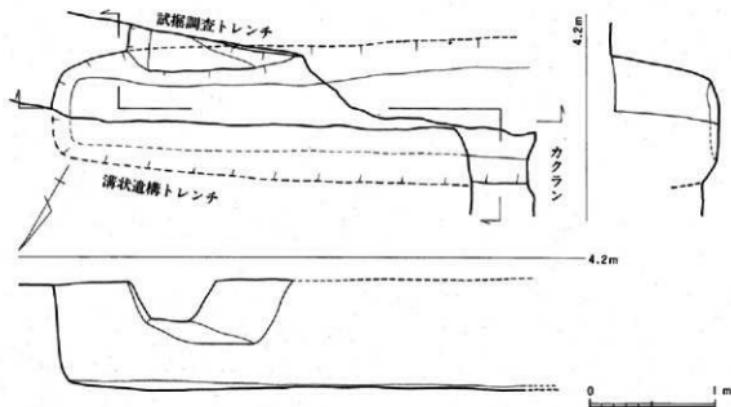


Fig. 18 2号土坑実測図 (1/40)



Fig. 19 2号土坑

(1)全景(北西より) (2)全景(南西より) (3)埋積状況(北東より) (4)擾乱部分立ち上がり(北東より)

### (1) 土坑

明らかに柱穴とは異なる、大型の掘り込みを持つものを土坑とした。土坑は5基検出したが、いずれも遺物の出土はなかった。

#### 2号土坑

2号土坑は、溝状造構を切り込んで營まれている。搅乱坑壁面でまず確認したもので、黄色砂を埋土とする。大半を搅乱坑に切られるが、遺存部分から推定して幅112cm、長さ390cm以上、検出面からの深さ80cm前後をかる、断面台形の細長い土坑と考えられる。埋土中より若干の弥生式土器片が出土したが、溝状造構から紛れ込んだものと考えた。ただし、砂を埋土するなど、溝状造構と大きな時期差はないと思われるが、あるいは溝状造構が埋没した弥生時代後期をあまり下らない時期に營まれた可能性はある。

造構の性格は不明だが、本来は搅乱に切られている南西側に延びていくものであろうから、何らかの区画溝の一部を想定しても良いかも知れない。ただし、2号土坑の東端は、明らかに垂直に近い急角度で立ち上っており、より東側へは続かない。区画溝としても、一定の領域を囲い込むものにはならないだろう。

### (2) 柱穴・掘立柱建物跡

調査区全域から、まばらに掘立柱建物の柱穴と見られる小ピットを検出した。しかし、これまで度々述べてきた様に、搅乱坑が極めて多く、これらの柱穴から建物跡を復元するのは、困難である。一応、柱穴の配置から推定した柱筋の線をFig.7の全体図中に示した。図中ではSB-01~03としているが、不確実であることをお断りしておく。

Fig.20に示したのは、SB-01である。仮に北西側の柱筋を桁行、南西側を梁間として説明すると、



Fig.20 SB01(南東より)

桁行2間以上、梁間2間以上だが、梁間の1間のスパンは小さく、桁行の1間分を2間に分けている形となる。桁行の柱間寸法は、西から180cm、225cm、梁間の寸法は、北から110cm、105cmである。

これらの柱穴からは、明らかに柱穴の時期を示すと考えうる遺物の出土はなく、時期不明と言わざるをえない。しいて言えば、柱穴がいずれも小さい点から、中世に属する可能性もある。

### 第3章 小結

堅粕遺跡第6次調査では、近・現代の搅乱が著しく、十分な成果をあげられなかった。本調査の結果を踏え、若干の留意点をあげてまとめにかえたい。

弥生時代の構造遺構は、結局谷頭部分と判断したのだが、土器の遺存状況・出土状況から、近隣に弥生時代後期の集落の存在をうかがわせた。堅粕遺跡のこれまでの調査をみても、弥生時代の遺構は少なく、第1次調査で弥生時代後期の土坑が検出されているにすぎない。第1次調査地点は、砂丘の稜線に近い南側傾斜面にあたると考えられているが、砂丘北側斜面及び頂部は、博多湾からの海風やそれがまき上げる砂塵をとともに受けることになるから、集落としては南側斜面に営むのが適当であろう。すると、砂丘背景の南側斜面にそって集落が存在した可能性を考えうる。いずれにしても、遺構の検出、旧地形の復原とも今後の調査を待たざるをえない。

さて、もう一点注目すべきは、中世段階の遺構・遺物が堅粕遺跡のこれまでの調査を含めて、検出されていない点である。第6次調査でも、若干の攝立柱建物跡が中世に属する可能性はあるものの、これを裏付ける遺物は、全く出土していない。中世の堅粕遺跡群周辺に目を広げると、西には中世最大の貿易都市「博多」があった。で第6次調査地点は、博多聖福寺の真裏にあたり、直線距離では120mしかはなれていない。現在この間に石堂川が流れているが、石堂川は16世紀中頃の開削と言われ、等高線の検討による埋没地形の検討によっても博多の砂丘が堅粕・吉塚方向につながってのびていたことが推定されている。目を東に転じると、堅粕遺跡の2.5km程東には箱崎遺跡群がある。箱崎遺跡群は宇美川が博多湾に出た河川部の入江を港（津）とし、これと博多湾とを隔てる砂丘上に勅請された芦崎八幡宮を核としてできた「マチ」の遺跡である。これまでの調査では、12世紀以降「マチ」が形成された様で「博多」と「箱崎」は対にして語られることが多かった。ところが、この両遺跡にはさまれた堅粕遺跡・吉塚本町遺跡では、中世の遺構・遺物は全く検出されていないのである。一方奈良時代から平安時代前半までは、堅粕遺跡群第4次調査、第5次調査で指摘された様に（P5～6参照）一般集落とは異なる公的な施設の存在すら想定されている。平安時代後半から中世を通じて、遺構・遺物が全く出土しない状況との格差は、かなり大きいと言える。「博多」、「箱崎」という東西の両町場の領域認識およびそのための装置、そしてその領域外がどういう場として認識されていたのか（たとえば、元弘三年（1333）の「博多日記」では、千代松原あたりが博多の葬地となっていたことをうかがわせる記事がある）、いずれも今後の課題ではあるが、「博多」「箱崎」を考える上で、また堅粕遺跡群や吉塚本町遺跡群を考える上で、無視できない重要な問題点であると思う。

上述した様に、堅粕遺跡群では、調査次数こそ6次にも及ぶ発掘調査がなされてきたが、どの調査地点においても全体に搅乱がひどく、遺跡の全体的様相、時代的変遷を知ることが、なかなか困難な状況にある。今後の調査の進展に期待するところ、大である。

---

## 堅粕 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第405集

平成 7 年 3 月 15 日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 緑ミドリ印刷  
福岡市博多区西月隈1丁目122-4

---